



欲望のストラテジー：
欲望としてのディスカール（予備研究）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 雅夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011157

欲望のストラテジー

—欲望としてのディスクール（予備研究）

杉山雅夫

序章. 文化というディスクール

1. 文化の優位性

1章. 欲望とディスクール

1. 欲望の実現

2. 強制力とディスクール

2章. 組織化された欲望のシステム

1. 暴力と権力

2. ディスクール形成と権力

3. ディスクール自己生産・管理メカニズムの生成

4. ディスクールの有効領域の形成

5. 基本ディスクールの創出

3章. 欲望の浄化

1. 欲のない世界の創出と世界の論理化

2. 学問的ディスクール

3. 学問のシステムと方法

4. 論理化された欲望

5. 批判的ディスクールの成立

終章. 論理化を逃れる闇としての欲望

序章——文化というディスクール

政治的変化や経済的な市場拡大による他者との出会いは、その期待とは裏腹に大きな亀裂を生んでいるように見える。人は誠実さを通じていつかは相互に分かりあえる、といったような特殊な生活環境や習慣の他者への無制限な延長は、自己領域の一方的な普遍化であり、自己の領域外の同じような特殊な「普遍主義」とたちまち衝突してしまうであろう。同じ歴史的社会的コンテクストにおいてはこうした個人単位の普遍主義の間には、様々な調整機能が働いていて、衝突を回避、あるいは調整する。しかしこうした調整機能、共通の諸規範が無効になる領域、即ち他者空間においてようやく、何が、自らにとって親密な空間である自己空間を埋めていたのかが、はっきりしてくるのである。

例えば、普遍的であるとされている、存在する人間としての権利、平等といったいわゆるヒューマニズムの原理もそうした場では意味を持たない。ヒューマニズムは、夫々の人間に独自性を与え、平等を保証するといったような原理ではなく、人間の集団の質を強者が弱者を一方的見地から判定する、恣意的でイデオロギー的な尺度に過ぎない。また特定の歴史的社会的財産を共有する集団は、特殊な共同空間を共有するが、これは他者を排除する原理である。それは他者にイエスカノーの二者択一を迫り、イエスの場合には際限のない服従を、ノーの場合には拒絶を突き付ける。同一の共有空間内においてもっとも自己批判的な者でも、それに捕われ、逃げることはできない。なぜなら、こうした集団内の共有空間は批判する言語や規範、すなわちディスクールの枠そのものを彼に提供しているからである。そしてこのディスクールの形式なくしてはそもそも、人は現実を分節化することができないのである。

ある民族や人間集団は、外部から見た場合、共通の内部的価値観を共有していると考えられている。一方では、こうした集団内部においては、物理的、精神的な価値観に起因する対立が常に存在し、時には暴力的武力的対立にまで至る。しかしこうして相対立する複数の集団内集団すらも、外部に対しては文化という名の下に、他者に対しては、統一された総体として現われよう

とする。文化とはある共同体の価値についての総体的なディスクールであるが、恣意的であると同時に超越的であり、あらゆる実証的な厳密化を困難にしてしまう。「西洋文化」や「中国文化」といったおおよっぱな概念は、包括的に過ぎ、結局個々人の断片的な偏見に堕してしまう。こうしたディスクールは実体の存在しえないものであり、胡散臭いものである。しかしそれにもかかわらず、この「文化」は他者を侵略し、犯し、征服しうる。しかしこの場合、その「文化」の当事者がかならずそのディスクールの生産者であり管理者である訳ではない。ディスクールは第三者から第三者へと噂話のように流通し、生産され、変更され、抹殺され、付け加えられる。このように第三者によって書き換えられてゆく「文化」についての話は、当事者の産み出す自らについての「文化」形成にも作用する¹。

このように形成される各集団についての「文化」ディスクールは、それぞれ取り込まれ、排除され、競合しあいながら偶然的な政治的、経済的力によって影響されつつ、価値的秩序を形成してゆく。場合によっては、ある集団が持つ別の集団についてのディスクールは、政治的な目的のための projection であったり、manipulation であったりしうる。しかし一方で集団についてのディスクールは、歴史的な経過を経て、文化を越え、他集団の領域にも定着してゆく。ディスクール自体は、偶然的なものであり、そのように形成された価値も偶然的である。しかし各文化ディスクールには明らかに秩序関係が形作られる。即ちある領域についてある特定の集団が優位であるとみなされる。こうした秩序はどのように形成されるのであろう。

文化の優位性についてのディスクール形成にとって決定的であるのは、質よりも量であるように見える。つまり、ある特定の対象について、どれほど

1. 外国の製品、たとえばコカ・コーラは、生産された領域から隔たるほど、単なる飲料の一種として受け入れられるのではなく、ある「文化」についてのディスクールと対になって、またその中で享受される。その際この飲料は総体的「文化」の一部であると認識される。このディスクールは、マスメディアによって広められた経済的（自由経済など）、政治的なさまざまな価値（民主主義など）と連鎖し合う。しかしこの飲料と「文化」を連関付けるその在り方は偶然的であり、現実を反映しているというよりは虚構のイメージの連なりの上に成り立っているに過ぎない。こうした増幅されたイメージは再び当事者の自己イメージに影響を与える。

多くの言葉が消費されたか、ということが優位を決めるように見える。当然のことながらある特定のディスクールが形成されるためには、それについての素材が常に供給されなければならない。物理的なディスクールの供給システムが必要とされるのである。

我々は本論において、ヨーロッパについての「文化」ディスクールについて考えてみたい。そこにはいくつかの特性が見られるように思われる。ひとつは空間的に広範な、優位性についてのディスクールの形成であり、もうひとつはそれを可能にした言語生産管理メカニズムの創出である。

1. 文化の優位性

近代以来の西欧自然科学は論理と実証という「厳密」な方法に基づき、知の客観性を形成しようと試みてきた。こうした知の客観性はその疑問を差し挟ませない厳密さで、世界を再編成し、古く、「合理性」に欠けた世界を、人間の理性と合理性によって、コントロール可能な新しい世界へと作り変えてゆくはずであった。物理的な生活上の快適さと理性による人類の幸福の実現はそこにおける大きな科学の到達点のはずであった。しかしこうした夢は、頑強に繰り返される戦争や民族、人種間の対立によって日々存続しがたくなっているように見える。それどころかこれまでのあるべき世界への努力と現実との矛盾はすでにアポリアになっているといえるのではないだろうか。夢が実現しないのはこれまでの人類の怠慢に過ぎないのであろうか。長く待たれていた未来の楽園は本当に実現されるのであろうか²。それともこれまでの平和と自由と幸福のプログラムにはなんらかの基本的な、しかも重大な、誤りが隠されていたのであろうか。

以下にまず、ディスクールという問題を中心に考えてみたい。ここでは、ディスクールというものを、ある一定のグループを形成する断片的な言説の

2. 西欧においては、進歩は最終段階に到達したという意見さえある。そうした集団においては、現在の水準を保持してゆくことが課題とされている。これは、歴史的意味において彼らの「理念」が実現してしまったということであろうか。

集合と考えておきたい³。議論の集合としてのディスクールは偶然性によって形成されてゆくものでありながら、いつしか我々を取り巻き、我々の生活を規定し、我々の思考をも支配してゆく。そしてこのディスクールはいつしか我々にとって疑問の余地のない絶対的な規範になってしまう。無論日常的な行動規範としてのディスクールは、社会生活をするうえで必要なものであり、こうした規範が存在しなければ、我々は日常生活を営めなくなってしまうであろう。またディスクールには様々なレベルが存在する。たとえば、個人的、社会的、文化的、歴史的なレベル等々である。これらディスクールの夫々のレベルは、相互に規定しあっているが、上位レベルの我々に対する規定力は、その抽象性ゆえに下位のものに比べて緩やかなものと見做されるであろう。しかし日常的レベルのディスクールの規定力は、その平板さゆえに認識されにくいものとなる。

ひとつの社会においてある種のディスクールが支配的になるのは自然であるが、周知のようにこうしたものはどれも歴史的な変容をくりかえしつつも、大枠では独自性をも持っている。しかし現在においてはひとつの社会を越えた、間社会的なディスクールの形成と変容がさらに問題となってくる。なぜなら経済的政治的軍事的利害はとうに国境を越えてしまっているからである。そしてこうしたグローバル化を容易にしたのはまさに科学技術の進展であった。科学技術の威力は技術的な正確さ、速さ、新奇さといった特長をもつ「もの」として産み出される。しかしそれは自然科学的成果の象徴ではあっても、単なる最終的な産物に過ぎない。本質的なのは、むしろ科学技術を産み出す基盤としての言説の機構であり、それを支える価値観であり、それを拡大し続けようとする意志であろう。この近代ヨーロッパに発生してきた自然科学的ディスクールはいくつかの点で他種のディスクールと性格を異にしている。

元来どのディスクールも普遍性を要求するという点では同様であろう。し

3. Foucault, Michel: "L'ordre du discours" (邦訳「言語表現の秩序」中村雄二郎訳、河出書房新社、6刷、1991年〔初刷1981年〕)を参照。この論におけるディスクールという概念はフーコーのこの本に多くをよっているが、以下に変容した形で導入してゆくことにしたい。

かし自然科学と言うディスクールの独自性は、他の文化内ディスクールと異なり、文化内普遍性を越えて、間文化的にも普遍性をためらうことなく要求し続ける、という点にある。自然科学はその普遍要求の正当化の根拠として、日常的な場面においては、例えば効率を掲げるであろう。自然科学的産物である車は、運ぶという点においては、燃料さえあれば、馬車や動物などよりも効率的であるし、誰が操作しようと同じように機能する。銃も槍よりも効率的であるし、扱いが容易である。こうした効率的合理的普遍性は、日常的レベルにおける自然科学的ディスクールの基本的性質を表している。また、認識的レベルにおいては、自然科学的ディスクールは、知と世界とをそれ独自のディスクールの方法に基づいて厳密に一体化しようとする。しかもこの両者間のコード化は反復と実証によって可逆性を保証されているのである。そこで自然科学はその自らの方法によって描写された時空間を実際にその予測に基づき、かなりの確実性をもって反復的に操作しうる。こうしたディスクールに基づく予測に対する確実性への期待度は、他種のディスクールの及ばない点であろう。例えばアリストテレスは数学や論理学等を真理に基づくものとし、他の学問を蓋然性に基づくものとして、いくつかの論証の方法を考えた⁴。近代ヨーロッパは、こうした古典時代に確立され、中世的キリスト教的議論を経て続いた真実に至るための思考メカニズムの完成への夢⁵を、再び近代の学問という新しい主役に託したのである。現在たとえ自然科学が真理という大題目を放棄し、仮説とその検証という慎ましい方法論に充足しているとしても、そこに隠れている、真理への暫時的接近という基本的コンセプトは否定しえないであろう。

ところで、こうした真実への手段の所有とその検証による自己確信は、権

4. アリストテレスの「分析論前書・後書」、「トピック」、「レトリック」等。重要な点は論証の方法であり、前者において、厳密な数学的論理的論証の方法としては、公理公準に基づく三段論法 (Syllogismus)、トピックやレトリックにおいて、蓋然性に基づく三段論法が体系化されている。

5. 例えば、アリストテレスの中世における受容と影響については Marenbon, John: "Later Medieval Philosophy (1150-1350) An Introduction", London New York, 1987, 1991 (邦訳「後期中世の哲学」加藤雅人訳、勁草書房、1989年)を参照。

力の所有という意識と連続している。なぜなら真理を所有しているものは常に正しく、真理を知らないものはその真実と、その所有者に無条件で従うべきだからである。こうして近代自然科学的方法、思考と真理と権力は、とりわけ自然科学的ディスクリスによる真理の独占を通じて、連続するものとなる。

ところで、権力の起源は個々人の欲望である。したがってこうした近代以降の発展において、近代西欧のディスクリスが世界の客観的分節化を目指すというのであれば、欲望や権力という問題と深くかかわるべきはずであり、この問題を中心課題の一つとして自らのシステムの中に組み入れるべきであった。しかしながら、近代以降のヨーロッパにおけるディスクリスは、ディスクリスの学問化という過程で欲望の正当化とは全く逆の、ディスクリスからの欲望の追放、つまり自然科学の名の下にディスクリスの禁欲化を徹底してきたのである。しかし欲望を追放したというのは、かならずしも欲望を問題にしなかったというのではない。逆に欲望は、性欲や権力というテーマにおいて学問化され、すなわち理性の検証と構造化を受け、飼い慣らされ初めたのである⁶。その結果合理化する理性を逃れるはずの欲望は、秩序づけられ、制御可能なものとして無害化されることになる。

しかし学問化の過程で捕えられたと考えられた欲望も実は、客体化された欲望自身というよりは、学問という欲望の自己投影にすぎなかったかも知れない。なぜなら近代の学問の究極的課題は、客観性と論理性をあらゆる対象の中に見つけだし、実証することだからである。西洋的学問の背後に潜む超越論的な、アプリアリに設定された物理学的形而上学の実現への夢。これは同時に、ファウストに象徴されるような、ヨーロッパ近代における真理の独占への野望である。しかし欲望が、形而上学の中に解消されることは決してない。形而上学は欲望の一形態 — しかも倒錯的な — に過ぎないからである。欲望の最終目的はあくまで現実との直接的なかわりであり、そこにおける充足である。

6. こうした研究の例としては、Foucault, Michel: "Histoire de la sexualité, I, La volanté de savoir". 邦訳「性の歴史 I、知への意志」、渡辺守章訳、新潮社、1986年。

この意味において、ヨーロッパにおける学問的、自然科学的ディスクールの展開の時期が、富と支配欲の際限のない実現化である植民地政策の展開の時期と重なり合っているのは、決して偶然なことではない。十五世紀末に始まるとりわけアメリカの植民地化は、ヨーロッパ的現実の世界への搬出という使命と切り離すことはできないであろう⁷。この場合、技術的発展と優位ということのみならず、それを可能にする知の所有者という意識が意味を持ったことはまちがいない。西洋的ディスクールの適応されない空間での欲望の実現。優越した知の伝播者、ミッションとしての意識に支えられた現実の所有者としての自意識。こうした歴史にパラレルに展開する、ヨーロッパ的ディスクール空間での「学問的」思考による「近代化」。欲望は、どのように近代における西歐的学問の展開とかかわっているのでしょうか。

1章. 欲望とディスクール

この論では、欲望をディスクールの根源として考える⁸。欲望は多くの場合制御不可能でエゴイスティックな原理と考えられ、意識無意識的に遠ざけられ、やむをえないときでも別のレッテルを張られ、正当化されてようやく問題にされるように見える。欲望は我々の日常生活の中でも、権力欲や所有欲として遍在している。そして同時にタブー視されるが、我々人間にとって、常に潜在的な脅威でありつづけている⁹。欲望のコントロールは個人的なレ

7. 例えば15世紀末における、スペインの南アメリカにおける文明の破壊と民族の絶滅化。ラス・カサス「インディアスの破壊についての簡潔な報告」(染田英藤訳、岩波文庫、第19刷、1991年〔初刷1976年〕)参照。

8. ディスクールと欲望という考えは、いわゆるポストモダンの議論においてしばしば論ぜられているが、ここではとりわけ、「言語表現の秩序」において述べられたフーコーの着想に負っている。

9. ホッブスの次の言葉を参照。In statu hominum naturali potentiam certam et irresistibilem jus conferre regendi imperandique in eos, qui resistere non possunt... (人間の自然状態において、断固として、抵抗しがたい権力は、抵抗できない人々を支配し、命令する権利を与える) Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd.5, Basel (Schwab & Co), 1980, "Macht"の項, p.596.

ベルの問題ではなく、社会集団のレベルの問題であり、その社会集団の持つ集団的倫理の中でのみ意味を持つ。それぞれの社会は、そもそも社会という統一体を形成するかぎり、管理の体制を形成してゆく。その際政治的経済的軍事的機構に正当性を与えるものは、倫理的な裏付けである。平等や自立や正義といった倫理概念は政治スローガンとしても欠かせないものになっている。まさにこうした倫理的な諸価値の意味は、欲望の馴致と管理である。欲望を個の領域に囲い込んでおく、あるいは他者へのその無際限な行使を制御する、その際なるべく自己管理をさせる、こうしたことが、倫理のそもそもの存在意義であろう。

ところで倫理的な統制は、法的言語などを介し間接的に行われる。政治的な理念は社会的、倫理的な理念と組み合わせられ、重層的に産み出され、さまざまなディスクールとして流布されてゆく。その際、欲望の統制は個的欲望の制限という形ではなく、より高度な社会的理念の実現として実行される。個人の利益追及を最大限に許すとといったような政治的スローガンは、欲望の囲い込みといった社会の基本的な存立意義に反するものであり、リップサービスに過ぎない。法的ディスクールが執行不可能な領域は公的暴力によって補われる。

1. 欲望の実現

欲望とは、自分の利益のために、なんらかの形で世界に影響を及ぼそうとする、まだ明確には分節化されていない段階における人間の本能的状態である。再生産される様々な欲望は、同一の起源である主体へと還元される。しかし主体はひとつの instance にすぎず、その特性は主体自体があらかじめ持つ統一性ではなく、逆に欲望の多様な特性によって性格づけられるであろう。

欲望は言語によって分節化される以前の状態であるので、現実化されるためには別の次元へと翻訳されなければならない。例えば、身振り、しぐさと言ったものもありうる。この場合は、個別的一回적であるので、他への影響力の限定された欲望とその実現が問題となるであろう。しかし多くの他者が

欲望の実現に係わる場合は、欲望が言語によって分節化される。言語化によって欲望は具体化、一般化され、他者によってより容易に、またより正確に理解可能となる。発話は欲望の外在化という意味では、社会化へのプロセスあり、欲望の実現化である。しかし問題はそれが接続するための支配のネットワークの存在であり、それが欠けていれば、単にモノローグに過ぎない。無論これは欲望のみずからの実現のための第一段階であり、さらに高次元の対策が取られねばならない。それは基本的に言語に基づく戦略であるが、最終的には、言語と暴力の一体化と体系化に向かう。

2. 強制力とディスクール

欲望の言語化によって、他の対話者との間に相互理解が可能な言語空間が構成される。しかし他者が発言者の意志を理解することと、その意志を実現するように協力することは別の問題である。とりわけ多数者を前提する場合には当然抵抗を考慮せねばならない。以下にディスクールをその自己実現という観点から二つのレベル、即ち、個人的レベルと社会的レベルにおいて考えてみたい。

ディスクールというものを個人レベルで考えた場合、個人とはディスクールの「生産者」であり、媒介者である。個人のレベルにおいてディスクールは、その場その場の状況に応じた命題、主張のやり取りということになる。このやり取りは、いくつかの大きな既存のディスクールの枠に寄り架かりながらも、少なくともそれらの解釈や組合せにおいて、また状況の一回性という点においては独自である。このような独自性はまた大きなディスクールを変えうる可能性を持つ。しかし大きなディスクールの変容とは結果であり、個人的なレベルの対話に直接にかかわる問題ではない。ディスクールとは終結し、固定化した結果ではなく、変化してゆく総合的なプロセスである。

通常、対話における目的とは、基本的には自己の意志の実現であろう。何げない天候の挨拶にしても、無意味にかわされているわけではない。それは従来の関係の継続を希望する表現であると同時に、相手に権力の末端に留まろうという意志の表現であるかも知れない。又は対話自体が、話し相手との

関係において自分を優位に置こうという戦略であるかの知れない。いずれにしても相手に言葉を発するという事は、その問いかげによって、相手を呪縛し、間接直接に相手に影響力を行使することである。こうした言葉の機能は政治の場面に限定されたことではない。むしろ言葉の基本的機能なのである。対話とは相手との戦いであり、そこで戦われるのは、どちらかの優位性である。たとえば愛におけるなにげない個々の発話の最終目的が、相手の完全な支配であるように。

ところで、言語は現実を描写するものともいわれる。この場合前提とされているのは、我々の言語化以前にすでになんらかの、分節化された実体的な世界、あるいは意味がアプリアリに存在していると言うことである。しかし同一の出来事についての複数の目撃者の証言が異なるように、「現実」は、解釈の問題である。より多くの人に受け入れられた解釈が、現実を構成するようになる。言語空間とはこうした解釈、一時的に作り上げられた根拠のある、又は根拠のない現実についての様々なディスクールの集積であり、これらはやがて体系化され、より大きなディスクールを産み出し、それ自身が、様々なディスクール、様々な「現実」を再生産するメカニズムとなる。言語によってこうして生産された現実は、しかしながら常に「現実」的基盤を喪失する危険を背負う。というのも、古い現実にかえて新しい現実、ディスクールによる仮想的現実、が持続的にしかも偶発的に産み出されるからである。こうした古い現実が新しい現実によって、公における影響力を喪失し、無意味化する。現実についての解釈を提供するだけでは、欲望を実現しようとする主体が持続的な影響力を保ちうることは困難である。ではどのように一時的に仮定された「現実」を不変的なものとして他者に把握させうるのか。

新しい現実を唯一の現実として公に認識させるには、それがまさに身に迫ったものであり、他に選択の余地がないということを知らしめねばならないであろう。現実感覚を生み出すものは、なによりもまず一回的な、逃れることのできない「当事者」としての意識であろう。たとえばある提供された決定を認めなければ、我が身が非常な不利をこうむらねばならないといったような意識である。現実に関する様々なディスクールは、主体の、空間的時

間的に一時的であるという当事者としての認識において、初めて主体と交差し、その主体独自の「現実」として捕えられることになる。そして永続的に、例外なく主体に現実意識を与え続けるものこそ、「永続的な」暴力、死の恐怖である。暴力、死の恐怖のあるところ、主体は自らの環境を現実として受け入れざるをえない。ここにおいて主体は現実にいやおうなしに結びつけられることになる。したがって、拘束力のある、現実についての「現実的」なディスクールは、なんらかの形で暴力ないしは恐怖をとりこみ、内在化させ、それを必要なときに威嚇として提示することができなければならないのである。

2章. 組織化された欲望のシステム

上のような観点からすれば、死を含む暴力行使を前提としない国家は、国家権力としての一貫性を保持することが極めて難しくなるであろう。一方で相手を自らの意志に従わせる直接的な根拠としてのむき出しの政治的暴力は、近代的人間や政治システムについての近代的ディスクールの前進の中で、変容してきた。そして歴史的に洗練され、最終的な手段として理念化され、近代的なディスクールとして体系化される。たとえば法的体系において、国家による直接的な暴力行為は、法という警告によってヴェールをかけられ、あたかも普段は存在しないかのように見える。さらにディスクールは複合的なものとして生産され、けっして単一なものとしてあらわれない。刑罰のディスクールは、たとえば様々な政治的なディスクール、自由や民主主義と行った高次のスローガンと共に流通することによって、低次の、暴力に基づいた政治権力というディスクールを隠蔽してしまう。しかしながら、こうした異種のディスクールは置き替わって、次々に新しいものとなっていくのではなく、単に重層的に堆積しているに過ぎない。下層のディスクールも状況によってはたちまちアクチュアルなものとして甦りうるのである¹⁰。

10. とりわけ、ヨーロッパにおける最近のナチズムやファシズムの政治的レベルでの復活は、こうしたことの証であり、過去のもの=克服されたものという関係は存在しない。歴史は常に新しいものである。

いずれにしる国家は、偶然的で、様々な政治的、経済的、歴史的、社会的等々のディスクールを管理しやすいように、行政機構によって整理し、単純化せねばならない。政治権力機構は立法化や、様々な規制によって、いくつかの議論を取り込み、増幅し、あるいは除外し、無視し、あるいは無効化しようとする。以下においては、個々人の欲望に基づく、異質で多様な形態のディスクールが、どのようにむき出しの欲望という存在を変容させ、一般に受け入れ可能な法や制度という「普遍的」形態となるのか、またそれがどのように国家という統一的単位へと再編成されてゆくのかを見てゆきたい。

1. 暴力と権力

人間の集団が存在し、それが統治されるためには、威嚇しうる政治権力の行使が前提となる。この場合の政治権力はむき出しの暴力ではなく、正当化され、組織化され、一定の秩序に基づいた暴力の行使をも含む、強制力である。権力と暴力に関してはすでに様々論じられているが¹¹、むしろ定義の問題であろう。ここでは暴力を、公に認められていない、身体への直接的な危害と考えたい。暴力も組織化されうるが、いずれにしてもこれは秩序の破壊と見做され、権力は秩序を保持するための必要悪として考えられるであろう。

2. ディスクールの形成と権力

政治権力は、現代においてはもはや、死の威嚇によって支配を続けることはできない。逆に今は生へのきめ細かい配慮を提供するといった柔らかな支配を行う。しかし、この国家によって提供された枠を逸脱することは、いわゆる「生活水準」ぎりぎりの、貧困という、現在においては死と同じくらい恐れられている状況を抱え込むことでもある。こうした事実について大声で語ることは、現代におけるタブーである。

政治権力は、権力保持のために国家についてのいいイメージをたえず創り

11. 例えば Arendt, Hannah: "Macht und Gewalt", München Zürich (Piper), 8. Aufl., 1993.

上げようとするであろう。例えば強かさであったり、経済的な豊かさであったり、文化的な質の高さであったりする。こうしたイメージは政治的権力の座についている人間の直接的なマニピレートによるばかりではない。むしろそうした特定の個人や限られたグループのみによるイメージの創出は、権力に拮抗する、様々な政治経済団体あるいはその他の圧力団体などが存在する現在においては極めて難しい。なぜならそれぞれの集団がそれぞれにとっての真実であるはずの理念やイメージを絶え間なく産み出しているからである。政治的権力を担当する特定のグループが非独裁的な方法で自らの主張を達成するには、膨大な言語的ディスクールの消費と言語外の戦略が必要になる。しかしながら、彼らの優位な点は、彼らが自らにとってポジティブに働きうるようなテーマを選択し、それについて議論を発生させることができる、ということである。政治権力の担当者はその結果様々な集団から反響のように産み出されたディスクールをモニターし、「民主的なもの」として利用することができる。しかし同時に、権力担当者は受動的な賛同者、協力者のみならず、積極的な協力者を常に見いだしうるのである。かれらは政治的権力者の懐に入り込むことで自分の力の領域を拡大しようとする。そしてこうした政治の中核と外部の賛同者との連鎖と領域の拡大の中で、特定の方向を目指すディスクールがしだいに大きな形を取ってくるのである。

しかし政治権力がどのように、非独裁、あるいは独裁の形で自らを正当化しないし理想化するイメージを作り上げようとしても、これらは多くの場合、外的な要因による偶然性に依存している。それぞれの部分的なディスクールは、それぞれ個別的な利害に立ったもので、より多く偶然性に依存しているし、その時その時の様々に分散された権力のコンステレーションはそれぞれ特殊だからである。特定の政治権力が唯一の普遍的なディスクールを政治的な操作によってのみ流布させるということは困難である。可能であるとすれば、そうしたディスクールがテロ、即ちむき出しの暴力を伴う場合のみであろう。しかしたとえ特定の政治権力者が、自ら望むような政治機構を暴力によって作り上げたとしても、それは次々と生の意味を産み出し続けられるような自給自足的な意味連関、意味生産のシステムを産み出すことはできない。そこでは物理的強制が伴わねばならないという限りにおいて、一時的なもの

に過ぎない。自給自足的意味生産のディスクール、即ち「文化的」ディスクールはむしろ余剰として産み出されるのである。政治的権力がそこに係われるのは、結果としてのみである。即ち、政治権力は間接的に、すなわち意図的なディスクール形成の偶然的な産物として、しかも時間的に後になって、別の形で自らについてのイメージを付与されてゆくにすぎない。そして、ある領域を統括する大きなディスクールは、その生成過程において個々の下位ディスクールと同時に、それに伴うメタ・ディスクールを同時に産み出してゆく。こうしたプロセスの中で、緩やかに連関したそれぞれのディスクールは、大きな共通の枠のなかに連関づけられ、日常的な語彙、つまり倫理的行動規範へと翻訳されてゆくのである。問題は、どのようにして雑多で偶然的な、時には相対立するような雑多な下位ディスクールが、あるいは互いに排除しあい、あるいは融合しながら巨大で「普遍的な」ディスクール、たとえば自由であるとか平等であるとかいった、を形成してゆくのか、とすることになる。

3. ディスクール自己生産・管理メカニズムの生成

近代ヨーロッパのディスクールの特質の一つは、結果として、自らの領域外にも、自らについての膨大なディスクールの集積が存在するということであろう。こうしたディスクールの量は、ヨーロッパの他文化への関心と進出とも相関関係がある。15世紀末にアメリカを植民地化し初めて以来、ヨーロッパは、その実際の存在によって、自らについてのディスクールを発生させ、また同時にミッションを初めとする人間たちからのさまざまな異文化に関する報告を蓄積することとなった。そしてこれはまたさまざまな自国文化についての reflection を産み出すことになった。しかし問題は、結果としてのディスクールの蓄積よりも、なぜヨーロッパがそれほど多くのディスクールを産み出し、なおかつ外国にまでその領域を広げ得たのかということである。

ヨーロッパが海外にまで勢力を広げた直接的な背景のひとつには、なかんづく強力な軍事力を可能にした技術の発展がある。船や羅針盤、銃器と

いったものなしに海外への領地拡大といったことは考えられない。しかしこうした技術はすでに中国においてもとうに可能であった¹²。我々はここで、こうした技術を可能にした母体としての科学技術の母体となるシステムを考える必要がある。しかしここで科学技術とは単に学問領域としての自然科学部門をさしているわけではない。そうではなくて、自然科学的技術を積極的に利用し、こうした原理に基づく世界の再構成を推し進めていこうとする特殊なディスクールの生産メカニズムの在り方である。自然科学的な技術というものとは複合的な歴史的、社会的展開の中のディスクールのひとつの形態に過ぎない。問題はこうした思考を可能にする集団的ディスクールの原理である。

ヨーロッパは他文化にとって異質の、社会組織や社会管理、人間についての様々なディスクールを産み出した。こうしたディスクールは、外部からの影響をこうむっているにしても、歴史的になんらかの形で継承され、継続性を持つ。継続するディスクールが産み出される背後には一種のディスクールを生産するメカニズムといったものが考えられる。このディスクール生産のシステムは、まず第一にそれぞれの人間集団の、とりわけ権力を持つ構成員の願望をまとめ、方向づけ、調整するようにする。それは公での議論という形を取ることによって、正当性を獲得する。こうした政治的な、経済的な機能の他にこのシステムは第二の機能を持つ。即ち、自らの集団やこの構成員のために意味を自己生産するのである。個的な特性は集団の名の下に、集団のものは個人へと変換される。こうしてその該当する集団の内部で意味の相互交換がおこなわれる。こうしたプロセスにおいて、形態としては多様であるが、原理的に同一である、ディスクールをネットワーク化しうるディスク

12. Needham, Joseph: "Science and Civilisation in China", vol. 1, London New York Melbourne (Cambridge Univ. Press), 1954. 邦訳: ジョセフ・ニーダム「中国の科学と文明」第一巻序篇、礪波護他訳、思索社、1974年。とりわけ、第七章「中国西洋間の科学的思想と技術交流の実態」を参照。

ルスの生産メカニズムとも言うべきものが産み出されてくる¹³。これについては更に第3章で述べることにしたい。

4. ディスクールの有効領域の形成

およそいかなる形であれ、ディスクールが有効に機能するためには、それが、発信者の意図に従い、意味のあるものとみなされ、受け手の側に、まじめに受け取られなくてはならない。このためには、ディスクール生産メカニズムの存在とその充実のみでなく、受け手集団の側に、ディスクール認識有効領域が形成され、機能していなければならない。すなわち、意味理解の領域設定がなされなければならない。領域設定は、該当する集団の、ディスクールによる囲い込みである。それは主に特殊性、一回性の集団への一般化であり、Fichte のいわゆる Individuum から Gattung 形成¹⁴のための、すなわち国家、民族、人種についてのディスクールの生成である。こうしてその集団の構成員にのみ当てはまる意味づけがなされる。それらは歴史的、政治的状況を材料にしてポジティブに構成されるが、こうした複合的な価値設定による領域化は、いわゆる「文化」の有効領域と一致する。この範囲内において、ディスクールのメカニズムによって生み出される意味と価値は理解され、遂行されることが期待されるのである。この「文化」領域は、意味において豊穡であり、新しく伝達された意味に更に付加価値を付与し、さらに新しい価値の産出の手助けをする。

これは逆に見れば、他文化の排除であり、その無意味化でもあるが、その

13. ヨーロッパにおける高等教育の基礎科目 *artes liberales* 自由七学芸のうち、*grammatica, rhetorica, dialectica* という言語システムの連続的な継承とその知的ディスクール生産に果たした重要性を考えるとすれば、近代以前において、ディスクール生産のメカニズムが成立していたことは明白である。さらに中世におけるアリストテレスの新たな受容、スコラ哲学における議論の装置の繊細化、近代自然科学による継承発展という連続性の中で、ディスクールの生産メカニズムは制度化され、正当化されて存立していたのである。

14. Fichte, Johann Gottlieb: "Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters", Werke, hrsg. v. I. H. Fichte, Bd. 7., Dritte Vorlesung (p.34ff).

場合でも全く他者が受容されないということではない。他者はその意味領域で解釈しうる範囲でのみ、解釈される。その結果多くの場合、他者はエキゾチックな対象として箱庭化され、無害化されるのである。

このような自己の文化と他文化の質的な差異化は、両者を質的量的に違ったカテゴリーに分裂させ、表面上は相互連関性を形成するように見せながら、実は再興不能にしてゆく。即ちここにおいては、「他文化」というものが新たに作り出されると同時に、両者間に違ったディスクールの形態が生成される。そこでは当然ながら、異質性により、言語によるコミュニケーションは疑わしいものとされる。その結果、両者の対立の調整のために、むき出しの欲望に基づく武力的対決が容易に生じうるようになる。

5. 基本ディスクールの創出

ディスクール生産メカニズムはこの設定された意味領域に対応し、相互に連携しあって、意味の生産と意味連関のネットワーク化を行う。こうした領域をもつディスクールの生産は、基盤となるいくつかの母体ディスクールに基づき、これらの組み合わせによって、派生的なディスクールが生み出される。

ヨーロッパにおける近代の母体ディスクールの一つとして、「主体を持った個」という理念があげられる。その場合まず前提とされているのは、最終単位としての人間である。この個は自らに対して最終的な支配権を持ち、自給自足的であり、神を例外として、他者の影響を原則的に受けない。しかしこのような、Leibniz のいわゆる、「窓のない」個 (Individuum, individual) というどの人間にも妥当する実体のある個、という概念が生まれたのは、近代以降である。この individual という概念はしかしながら、人間臭さの全くないしろものである。例えば個の概念である Monado には、欲望と言ったような不確定要素は全く包含されていないのである。Leibniz の場合に individual について語られるのは、自律性やその多様さといったようなポジティブな事柄のみである¹⁵。この様な人間臭さのない、理念化された概念

15. Leibniz, G. W.: "Monadologie", In : "Die Hauptwerke", zusgefaßt und übertr. von Gerhard Krüger, pp.130-150.

が成立した原因は、一つには、individual という概念が長く論理学の概念として通用してきたこと、更に、近代における individual 概念が、神概念の模倣として成立したことにもよろう。18世紀になると個は自らを創造する自律した存在となる。個は一定の、自らにのみふさわしい自由の言説によって特徴づけられ、こうしたそれぞれの自由な行為（言説）によって自己は自らの個性 individuality を規定するのである（Fichte）¹⁶。この自由という概念は様々な近代的概念の中で、欲望と関わりうる数少ない概念の一つである。唯一者である神にとっての自由は無限であり得るにしても、人間にとっての自由は、現実的には全く意味の異なるものである。というのも、人間にとっての自由とは、他者との利害対立と直接関わっているからである。神学的な議論に基づく自由概念の理念の背後には、利害対立の調整という巨大なアポリアが隠されているのである。

上に見たような、近代における個々人に向けられて生み出された個や自由についてのディスクールは、社会全体に拡散し、より大きなディスクールを形成する。こうしたプロセスを経て、社会全体が、個体化され、自由を獲得し、主体の「文化」として理解されるようになるのである。

3章. 欲望の浄化

すでに述べたように、ディスクールの発生というものは、自己の欲望を現実化するという点に起因する。欲望は、集団的全体的なパースペクティヴから見れば、偶然的で、恣意的であり、統制のきまにくいものであり、常にカオスへなだれ込む危険を持つ。そのため、個々に発生するディスクールは、集団内に生ずる様々な葛藤を統制するためにより大きな、ディスクール発生自体を調整し、制御するメカニズムを作り上げてゆき、やがて個々に生み出されるディスクールは、それに従属するようになる。個人としての、あるいは限られた人間の間における「欲望」の実現も、例えば、「最大多数の最大幸福」という集団的政治的判断基準の枠と手続きを通せば、公的に正当化さ

16. "Historisches Wörterbuch der Philosophie", hrsg. v. J. Ritter u. K. Gründer, Bd.4, "Individuum, Individualität"の項, p 313.

れ、「社会的利益」に変容する。しかしその際にも、多数や幸福といった概念は相対的なものであり、現実には、絶対的な「社会的利益」などというものにはむろん存在し得ない。多くの場合このようなディスクール発生調整や統御を司るメカニズムは、欲望の統制を最終的な目標としているため、倫理的な要請として表現されるのが一般的である。

しかしながら、近代ヨーロッパにおける、もっともユニークな特徴は、自然科学に代表される、学問的ディスクールの発生である。なぜならこのディスクールは、従来のディスクールのように、欲望の統制といった倫理的領域とは全く異なる領域に、有効範囲を持つからである。即ちこのディスクールの対象は、「事実」であり、その最終目的は、世界の実証的論理化を通じての、客観的命題の際限ない生産である。

以下の章において、近代ヨーロッパにおけるディスクール生産のメカニズムの代表的なものの一つとしての学問的ディスクール生産装置が、どのように欲望というものを、取り込み、馴致し、それどころかやがてそれに全く別のレッテルをつけ、背定し、正当化したのか考えてみたい。

1. 欲のない世界の創出と世界の論理化

自然科学の対象である「事実」世界の、学問領域としての展開は、近代以降のものである。事実世界についての知識は、*curiositas*、すなわち好奇心を満たすだけの、選択されていない無制限の知識であり、本来の学問の最終目的である、幸福の問題に関わるものではないのである¹⁷。この意味で、事実世界へと向かう自然科学的認識関心は、新しい方法論と、体系化が必要とされる領域であった。「事実」世界はプトレマイオスの天動説から、ガリレオ等の地動説へのシフトに象徴されるように、具体的に旧来のアリストテレス的神学的世界像とは、明確に別の体系を持つものとして成立し始める。旧世界像は、神によって創造され、意味づけられ、目的論的に破綻なく構成されていた。そして、たとえ新しい世界像が、多くのイメージを旧来の世界像

17. Kopperschmidt, Josef, "Das Prinzip vernünftiger Rede, Sprache und Vernunft Teil 1", 1978, Stuttgart Berlin Köln Mainz (Kohlhammer), p.41.

から引き継いでいたにしても、両者は世界の起源という点については基本的に異なったものとなる。即ち、人格を持つ無限で、捕らえがたい唯一者（"Deus est ineffabilis"）は、次第に、数式で表現されるべき無人格な「原理」へと変化してゆく。

また学問的営みの重心は、存在における意味の探求といった存在論的な意味付けではなく、事象の生起を観察し、分類し、記述し、予想するといった物理学的な秩序付けに移ってゆく。問題とされるのは、厳格な「事実論理」なのである。この世界は、欲望の産み出す策略や衝突のない、質的に純粹で、理路整然と秩序づけられた、見通しの利く世界なのである。自然科学の活動領域は、このように旧来の倫理的学問領域とは、質的に異なった領域となる。

2. 学問的ディスクール

一般の日常的倫理ディスクールと近代ヨーロッパに発生した自然科学的ディスクールを分けるものは、その命題の実証的客観性に基づく普遍要求である。倫理的命題も同様に普遍的要求をするが、それらは基本的には現実を超越した理念であり、最終的で実証的かつ帰納的な裏付けができない¹⁸。そこでの議論はあくまで蓋然性をめぐって行われることになる。一方自然科学的ディスクールにおいては、事象はいくつかの要素へと分類され、単純化され、場合によってはさらに数学的、物理的命題へと書き換えられる。自然科学的立場からすれば、現実はこうした細目の原理の束によって機能しているということになる。従って自然科学は、一方でこうした部分的原理を際限なく生み出さねばならないことになる。他方自然科学が、「世界」の実証的な客観化をめざす限り、それは世界全体についての統一的なイメージを持っていなければならない。実際自然科学にとって、経験的事実の「体系化」は重要な使命である。従って、自然科学は、次々に生み出される部分的細目の原理をより大きな体系へと組み入れ、統合してゆかねばならない。その際になよりも先に前提されているのは、世界が、理解可能であり、それがいつの日

18. 例えば日本の江戸時代における学問である儒学は、倫理的ディスクールであり、推論的論理に基づいている。

か自然科学的方法によって、いずれか総合的に解明されるということである。自然科学が前提するのは、数式によって構成される破綻のない、体系化された世界である。しかし近代自然科学の言語の成立は偶然的であるし、世界はあらかじめ自然科学の言語によって分節化されているわけでない。自然科学は何に基づいて、理解可能性を前提し、どのようなコンセプトに基づいて全体的な体系を考えているのであろうか。論理的な意味で、部分が全体によって、また逆に全体は部分によって規定される、という考えは、イデオロギーにすぎない。また、こうした目的論的パースペクティブ自体が明確に自然科学の偏向をあらわすものなのであろう。

3. 学問のシステムと方法

こうした事実的自然世界の論理的、合理的な体系化の可能性は、進歩という直線的な時間観念によって支えられ、同時にこの時間的推移の中で次第に明確に認識され、確認され、実証されてゆくことになる。そしてこのプログラムの導き手こそ「理性」に他ならない。人間の認識の新たな領域への導き手として、理性は、人間の認識能力を少なくとも部分的に超越してはならない。Leibniz の Monado の考えに見られるように、ここの主体同士は相互通行が絶たれているにしても、神に対しては開かれている。理性とは神から人間に授けられた神の光である。この神の光である理性は、人間の現実にあって、光の対極である、非合理という闇、即ち欲望を照らし出し、それを駆逐する役目を負う。啓蒙の手段としての理性は、こうして、本来の領域である事実世界を踏み越えて、再び存在論的領域へと回帰するのである。しかしながらもはやこの理性は、人生の謎や、欲望といった合理化しがたい問題を、それ自体非合理的な問題設定として排除してゆく。そして自らの領域である、論理的合理的な世界領域を前提として、重層的で複雑な問題を合理化できるまで単純化し、抽象化して後、問題をたてるようになる。なぜなら理性にとって体系的論理化と合理的解釈は、自らの存在に関わる、至上命題だからであり、非合理性、非体系性を許容しないからである。

4. 論理化された欲望

上に述べたようなアリストテレス的、神学的な意味での存在論的ディスクールは、母体ディスクールの枠から追放され、新しい領域を持つ自然科学的ディスクールが成立する。そして新しい、中心的なディスクールとなる自然科学的ディスクールは、人間の生に直接関わろうとせず、事実世界という異次元の領域に超越化してしまうことになるのである。

しかしながら、そのようなことが可能であろうか。人間によって生産されるディスクールが、人間の生に関わらないということが、そもそもあり得るのであるか。と言うのも、これを生産するのは欲望を起源とする人間なのであるから。たとえ仮に新しいディスクールの領域から欲望というものが追放されたにしても、それは無論人間が、欲望を喪失した、ということでないことは明白である。むしろ欲望は、母体となるディスクールの領域から追放されたことで、これまでの存在論的、倫理的ディスクールの細かな網の目によって作り上げられた、厳格な監視の目を逃れ、野に放たれたといえる。自然科学的合理的まなざしは、もはや欲望などと言う由来も定かでない闇の存在には興味を持たなくなってしまう。今や議論の中心は、永久に繰り返されねばならない人間の内部での闘いではなく、外的に存在する世界の合理的な、未来に向けての再構成であり、外的環境の効率化となった。

即ち、倫理的存在論的なくびきを逃れた欲望は、全く自らにふさわしい環境を手に入れたことになる。なぜなら欲望の最終目的こそ、思うままの物質的な充足であるからである。こうした意味において、欲望は、結局、自然科学的ディスクールを自らの自己実現のために道具化したのである。欲望は今や欲望それ自体として現れることはない。欲望は学問的ディスクールの形式に則り、合理化され、概念化され、体系化され、中立的な形式を整えて現れる。欲望は、この意味において合理化されたのである。

5. 批判的ディスクールの成立

欲望の戦略、すなわち自らを学問という禁欲的なディスクールに変容させ、

自らの合理化し得ない実体を隠蔽しながら、密かに自然科学的ディスクールという手段を利用して、自己実現を図るという戦略は、倫理的足枷に捕らわれることのない、従来のディスクールのなし得なかった「思考の自由」を可能にした。欲望は、中立的な学問的ディスクールに翻訳され、怪しまれることなく、通りに出ることができるようになったのである。欲望は、学問的ディスクールの要求する規則、論理性や体系性、を満たしさえすればよくなった。欲望はこのことを通して、自らを開示することなく、自らの要求を普遍化しうようになったのである。

しかしこうした欲望によって道具化された自然科学的ディスクルスは、やがてその本来の機能を忘却され、あたかも欲望の対立概念であるかのように考えられ始める。即ち近代の「学問的」ディスクールは、いつしか純粋な現実批判のディスクールを産み出すのである。新しい「学問的」ディスクールによって担われ、形成されてきた近代社会は、こんどは、様々な批判にさらされる。この段階において批判者は、自らの存在を形而上化し、学問は、形而上化されるようになる。欲望の策略によって産み出され、その道具として用いられる近代のディスクールは、皮肉にも、欲望を押さえ込み、駆逐する道具として利用され始めることになる。

しかしこの批判的ディスクルスは、本来近代の自然科学的ディスクルスと同一、むしろそのものであり、批判は欲望の一形態にすぎないのである。批判的ディスクールによる欲望の批判は、トートロジーを繰り返しているにすぎない。即ちこうしたディスクルスもまた、最終的にレトリックの原則、つまり、あらゆる発話は自己の利害関心に基づくという原則に沿うものなのである。

結び——論理化を逃れる闇としての欲望

近代ヨーロッパにおける人文科学は、自然科学の現実面での成功に大きな影響を受け、その理論を受け入れようとしたばかりではなく、自然科学的ディスクールによって産み出されてきた現実にも、新しい学問領域を産み出すことによって、対応しようとしてきた。一方で自然科学は、政治的イデオ

ロギーと関わりのない、中立的な道具であると主張し、そういうものとして自らを認知させてきた。「道具」である自分をイデオロギー化するのは、利用する個人の問題であるというわけである。しかし例えば、銃は人を効率的に殺すために生まれたのではなかったのであろうか。その背後には、言語的コミュニケーションを無意味化する欲望が存在するのではないだろうか。病気を駆逐すべき薬は、永遠に生きたいという人間の願望実現へのとりあえずのプロセスではなかろうか。

近代の自然科学がその自らのディスクール生産メカニズムによって際限なく吐き出してきた、「事実」世界にまつわるディスクールは、陳腐化したかつての倫理ディスクールを周辺へと追いやり、新しい次元の世界を出現させたが、このことで、哲学などの存在論的、倫理的ディスクールは二流の学問的ディスクールになってしまい、有効領域を大幅に失った。しかしながら、倫理的判断メカニズムを内在していない自然科学的ディスクールは、欲望を方向づけ、管理することは決してできない。欲望は、自由な自己実現のため、これからも、自分にとって都合のよいこの種のディスクールの優位性を存続させようとするであろう。しかしながら他方で、永遠に同一の主題を繰り返さざるをえない存在論的倫理的ディスクールの復権も現在のところ困難のように見える。しかしまた自然科学的ディスクールは自己の産み出した膨大なディスクールによって躓き、自己崩壊する可能性もあり得る。この近代のディスクール・メカニズムが、いつか欲望＝世界と自らのコンセプトによる事実＝世界の埋めがたい乖離を認識することがあれば、新しいディスクールが生まれうるのであろうか。いずれにしろ、自然科学的ディスクールが闇としての我々の存在を、明らかにすることはおそらくあるまい。そして我々もそうした自らの本当の存在を、これからも本気で知ろうとしないのであろうか。

